

チャールズ・ディケンズの *Household Words* と大博覧会

山本まゆみ

はじめに

小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は一方で生涯ジャーナリストでもあった。ジャーナリストとしては 1831 年に新聞記者としてスタートして、亡くなるまで雑誌編集者として活動した。*Household Words* はディケンズが 1850 年 3 月 30 日から 1859 年 5 月 28 日まで編集した 24 頁で 2 ペンスの週刊誌で、ヴィクトリア朝を映し出す鏡のような存在だった。本発表では *Household Words* の 1851 年 1 月 4 日の “The Last Words of the Old Year” と 1851 年 7 月 5 日の “The Great Exhibition and the Little One” という二つの記事などを中心として、大博覧会に対するディケンズの屈折した複雑な内面を分析し、さらにそれを生み出したディケンズとヴィクトリア朝との関わりや、1853 年のディケンズの人種差別主義を示す *Household Words* の記事である “The Noble Savage” へつながるディケンズのかかえた根深い要因を明らかにする。一番目に “The Last Words of the Old Year” について、二番目に “The Great Exhibition and the Little One” について、その内容と問題点を考察し、そこからディケンズの人種差別主義的視点について、特に中国に寄せるまなざしを中心として分析する。

1. “The Last Words of the Old Year” について

Household Words の 1851 年 1 月 4 日の巻頭の “The Last Words of the Old Year” という記事は大博覧会の前にディケンズによって書かれ、1850 年を象徴する尊敬すべき 365 日という高齢の紳士と彼の信頼できる代理人である墓堀りの親方、そして出生記録係が登場する。老紳士は 12 月 31 日の真夜中に息を引き取ったが、亡くなる夜に 1850 年は破滅の年であり彼がすべての農夫の希望をくじき、土地を荒廃させ、農業の利益に致命的な打撃を与え、国を破滅させたと述べる (337)。彼はまたこの年の 5 月から開催される大博覧会に対してもイギリスの罪と怠慢の偉大な展示であるとして、主教やオックスフォードのカレッジ、貴族や紳士に現実を知るように呼び掛ける (338)。この記事では読者に向かって昨年度の出来事を下水道から始まり、教育、宗教問題についても述べている。大博覧会や多くのイギリスで起きた事柄が批判され、読者に厳しい現実を教える内容となっている。年度当初の記事は前年度をすべて否定する内容で、読者に改めてイギリスという国を見つめ直させるきっかけとなっただろう。新年度から読者に希望を与えるよりも絶望させる可能性を持っている。マイケル・スレイター (Michael Slater) によるとディケンズは一般的な政治の宣伝活動を嘲笑し、読者に前年度の特定の醜聞を思い出させる機会を捕えているのだ。さらにディケンズは賞賛と非難のために多くの個人を選び出し言及していて、その中に水晶宮の創造者のジョゼフ・パクストンもいる。彼は天才と賞賛されているとはいえ、その次に大博覧会がイギリスの罪と怠慢の展示であると批判が続くので、その存在が肯定されているとは言い難い。サビン・クレム (Sabine Clemm) はディケンズが大博覧会に対して抱いていた嫌悪感の証拠を二つ挙げている。その一つはディケンズが大博覧会による喧噪を避けるために、10 月までイングランド南東部の海岸保養地ブロードステアズでの滞在を延長したこと、そして二つ目は友人への手紙で大博覧会によるロンドンの騒音と群衆が耐えられないと書いていたことである。本音では大博覧会を嫌悪しながらも、大きな行事なので完全には否定できずに、*Household Words* の記事を書いたのだろう。

2. “The Great Exhibition and the Little One” について

1851 年 5 月 1 日から 10 月 11 日まで開催された大博覧会はヴィクトリア朝の 50 年代のさまざまな側面を露呈する催しであった。ディケンズは *Household Words* でいくつかの記事により、この催しについて読者に報告した。その一つの例がリチャード・ホーン (Richard Horne) とディケンズによる 1851 年 7 月 5 日の “The Great Exhibition and the Little One” で、最も進歩した国イギリスと最も遅れた中国の間の辛辣な比較からなっている。この記事はホーンとディケンズの中国人に対する人種差別主義を示すものと言えるだろう。

博覧会全体を体験する、あるいはカタログの十分の一に言及することも不可能なので、イギリスと中国が比較され、ハイパークの大博覧会のすぐそばで同時に行なわれていた中国博覧会を小博覧会と表現して、中国人に対して何百年も前に突然、停止した国民であると断言し、イギリスの原料や機械と中国の素材を比較し、イギリスの成果の偉大さと中国の驚くべき小ささを考えなさいと述べる (357-8)。万里の長城、北京の宮殿、バゴダなどがあっても何百年前と全く変わらず、同じ皇帝が同じ愚かさを示している。中国人は国内の物産のみを取引し、国外の人々とのすべての商取引を軽蔑し、警察組織も貧弱で、女性の足のサイズは 2 インチ半に

制限されていることなどが列挙されている。イギリスについては大博覧会に出品された印刷機を賞賛し、水晶宮の外側に置かれた巨大な錨を造船所の進歩を示すものとしている。高度の機能を持つ電動式時計、腕時計、計算器、最も卓越した品質のブロードウッドとコラード製造のピアノなどを挙げて、特に楽器の製造は国々の進歩の象徴であると断言し様々な分野でのイギリスの優秀さを誇示している (357-60)。これら二つの博覧会の比較は、中国人の一般の男女から皇帝に至るまでの軽視という手段によってイギリスの大博覧会の素晴らしさが際立つという手法を取っているため、中国人には不快な内容となっている。

おわりに

ディケンズの中国蔑視に対して Han Kou (範 虹) が “‘The Great Exhibition and the Little One’ ; Chinese Display in Victorian London” で批判的に論じている。大博覧会の前後の時代状況については、1851年1月から1864年11月に起きた洪秀全を指導者とする太平天国の乱が清王国の力を衰えさせ、その結果、皇帝は大博覧会への参加に無関心であり、中国展示館はイギリス領事とロンドン滞在の中国商人によって主に組織されることになった (215)。そして展示品は中国人でなく、東インド会社によって集められ、当時の中国の本物の品々を反映していなかった (216)。このような事情を示した後で、範虹はディケンズが一般の意見と反対のことを述べた原因が彼の強い国民的感情と当時の中国についての理解の欠如にあることを指摘している (217)。また範虹は中国を軽蔑に値する国として見下すのは、ディケンズの特異性でなく、ヴィクトリア朝イギリスの全体的な傾向であると述べている (206)。中国とイギリスの関係を見ると、大博覧会以前には1840年から1842年のアヘン戦争で清はイギリスに敗北し、大博覧会以後は1856年から1860年のアロー戦争で清は再びイギリスに屈服し天津の開港や領土の割譲を認めさせられることとなった。ディケンズの中国に対する突出した低い評価は、1853年に *Household Words* に掲載された、ディケンズがズールー・カフィール族のショーを見物した後の反応である “The Noble Savage” という記事でのインディアンとアフリカの黒人への激しい人種差別主義へと続いていくのだと考えられる。“The Noble Savage” は、最初に「私は高貴な野蛮人を全く信用していない」(143)と結論を提示し、続けて「野蛮人を文明化によって、地上から消滅させるべきだ」(143)と述べて、ディケンズが人種差別主義者と見なされる要因となった。大博覧会に関する経験はその後のディケンズの思考の傾向を決定する大きな要因の一つとなったであろう。大博覧会の建物の東半分を占めた 39 の諸外国とは、フランス、アメリカ、ドイツ、インド、カナダ、ボリヴィア、中国などで、ディケンズは知人への手紙の中で、大博覧会に否定的でありあまりに多くのものに当惑させられ恐怖心を感じたと書いている。単に外国嫌いや人種差別だけでは説明できない要素が存在したとも考えられる。

Works Cited

- Clemm, Sabine. *Dickens, Journalism, and Nationhood: Mapping the World in Household Words*. New York: Routledge, 2009.
- Dickens, Charles. “A Preliminary Word.” *Household Words*. Vol.1. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989.
- . “The Chinese Junk.” *The Dent Uniform Edition of Dickens’ Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol.2. London: Dent, 1996.
- . “The Great Exhibition and the Little One.” *Household Words*. Vol.3. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989.
- . “The Last Words of the Old Year.” *Household Words*. Vol.2. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989.
- . “The Noble Savage.” *The Dent Uniform Edition of Dickens’ Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol.3. London: Dent, 1998.
- Han, Kou. “‘The Great Exhibition and the Little One’ : Chinese Display in Victorian London.” 『大手前大学論集』第8号, 2008.
- Slater, Michael, ed. *The Dent Uniform Edition of Dickens’ Journalism*. Vol.2. London: Dent, 1996.